

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 21 日現在

機関番号：34314
 研究種目：若手研究(B)
 研究期間：2014～2016
 課題番号：26770029
 研究課題名(和文)1940年代の民衆宗教をめぐる宗教史的研究

 研究課題名(英文)A Study of the Popular Religions in the 1940s

 研究代表者
 永岡 崇(NAGAOKA, Takashi)

 佛教大学・研究推進部・特別研究員

 研究者番号：30725297
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：1940年代に現れた「新興宗教」をめぐる同時代および戦後の言説を批判的に検討した上で、こうした宗教を民衆宗教と位置づけ、宗教史・文化史の主題として検討しなおすべきことを提起した。つぎにGHQの宗教調査および特高警察の宗教調査を整理して、1940年代の民衆宗教に関する目録の作成を進め、同時代の民衆宗教研究の基盤を築くことができた。また、これらの資料をもとに、総力戦期から占領期にかけての御利益志向型/世直し志向型の民衆宗教の様態や主張を分析し、40年代における民衆の政治的想像力の発現として位置づけなおすべきであると論じた。
 これらの成果は、1940年代の民衆史研究に大きな貢献をなすものとする。

研究成果の概要(英文)：Through the critical analysis of the discourse on the Japanese "Shinko Shukyo", new religious movements, from the 1940s, I came to the conclusion that they should be categorised as the popular religions, which should be one of the major themes in intellectual or religious history of modern Japan. I am in the process of making a catalogue of the popular religious movements based on the sources such as the SCAP documents and the record of the Special High Police of the time. The catalogue should be a useful material for the further research of the popular religions in the 1940s.
 I then have focused on the claims of the religions about the worldly benefits as the reflection of the people's "political" imagination. The results from my research should contribute to understand the religious culture of the 1940s Japan.

研究分野：近代日本宗教史

キーワード：民衆宗教 総力戦 占領 新興宗教 宗教と政治

1. 研究開始当初の背景

1940年代前半の宗教運動に関する研究は非常に少ない。これには二重の理由があると考えられる。まずは史料的な制約である。言論統制の強化と紙不足などの原因から宗教集団が自由に印刷物を出版することは不可能となり、当時の宗教運動の実態を知るための文書資料は乏しい。今日手にしうる少数の印刷物も、いわば金太郎飴のように国家賛美、戦争賛美を謳うものであり、リアルな信仰のありようを知るための手がかりとしては扱えないのである。

もうひとつの理由は、この時期の宗教運動に関する歴史的評価の問題である。市川白弦『仏教者の戦争責任』（春秋社、1971年）やブライアン・ヴィクトリア『禅と戦争』（光人社、2001年）など従来の研究では、宗教者が戦争に協力するのであれ、抵抗するのであれ、多くの場合戦争や帝国主義への態度を主要な尺度として議論され、それ以上の積極的な意義が見出されずにきたため、単調な宗教像しか描かれなかった。

つぎに後半期に目を向けると、占領期の日本では、「神々のラッシュアワー」とも呼ばれる新宗教の群生がみられたことが知られている。同時代では鶴見俊輔ら「思想の科学」研究会の『戦後派の研究』（養徳社、1951年）が戦後の世相風俗として取り上げ、また当時を代表する宗教集団のひとつである璽宇に関しては對馬路人が詳細に検討している（『敗戦と世直し』『関西学院大学社会学部紀要』63号、1991年）。しかし、璽宇や天照皇太神宮教などごく一部を除けば、短期間で消滅していったこれらの“小さな神々”は、戦後の混乱期に咲いたあだ花として、単純な社会不安の反映といった評価しか与えられていないのである。

研究代表者は、これまでに、1940年代における天理教運動の展開を詳細に検討し、総力戦という経験が、天理教信仰の意味世界と実践様式の両面にわたって根本的な変容をもたらしたこと、またその過程で、天理教が雑多な形態の信仰を取り込みながら拡大する宗教運動としての性格を喪失していったことを明らかにした。だがそれは、この時代における既存の宗教集団の変容をたどるといって、従来の研究の枠組みを越えるものとはいえなかった。

こうした研究状況にラディカルな問題提起を行っているのが、渡辺順一である（『「大東亜」戦時下の教団態勢』『金光教学』35号、1995年）。渡辺は1940年代前半の数年間に金光教の信者数が60万人も減少している事実に着目し、教団が戦時体制を強めるなかで、貧・病・争に苦しむ多くの民衆を振り落していったことにこそ教団の戦争責任があると論じている。つまり、教団から脱落していった人びとの側から、民衆宗教の存在意義を問い直そうとするのである。申請者は、渡辺のこうした提起を引き受けて、既存の教団宗教

からいわば見放された民衆の救済願望に応じていった群小の宗教集団の痕跡をたどることで、民衆宗教の歴史的意義を再考し、1940年代の民衆史を描きなおすべく、本研究を構想した。

2. 研究の目的

本研究は、1940年代の日本社会における民衆宗教運動について、その生成と展開の実態を把握し、歴史的意義を明らかにすることを目的とした。

1940年代は、総力戦体制が強化され、やがて破局にいたる前半期と、敗戦後の混乱とGHQの指導による新体制の構築が並行する後半期に大別される。前半期には、仏教やキリスト教といった伝統宗教教団も、天理教や金光教などの旧民衆宗教教団も、戦時体制への協力姿勢を強める一方で、貧・病・争に苦しむ民衆たちの救済という側面を放棄していった。後半期も、組織や教義面での再建に忙しい諸教団に民衆救済の余裕はほとんどなかった。

そのような中、民衆の救済願望に応える活動をしていった群小の宗教集団が存在する。本研究は、彼らの活動を軸に、1940年代の民衆史を描きなおしていくことをめざした。

3. 研究の方法

(1) 同時代・戦後の支配者・言論界における1940年代民衆宗教イメージの検討

1940年代の民衆宗教をめぐる言説を批判的に検討して、当時の民衆宗教に関する従来の研究や批評が、それらの宗教のどのような部分に着目し、逆にどのような部分を見落とした、あるいは低く評価してきたのかを明らかにする。

具体的には、1930年代から戦後にいたるまで、宗教ブームに関する批評活動を展開したジャーナリスト・大宅壮一の著作、戦時中に宗教運動の動向を監視しつづけた特高警察による報告書、占領期の民衆宗教の動向を調査したGHQの報告書、占領期の新聞・雑誌における宗教関連記事などを対象として、同時代の言論が、いかなる民衆宗教（「新興宗教」）イメージを形成したのかを検討する。

さらに、村上重良『近代民衆宗教史の研究』（法藏館、1958年）をはじめとする戦後の民衆宗教研究が、どのような観点から天理教や大本などの民衆宗教を語ったのか、そしてなぜそこから1940年代の民衆宗教は排除されてしまったのかについても明らかにする。とりわけ、民衆宗教における呪術的治病や身体性の問題がどのように扱われているのかを検討することによって、個人の内面における宗教性を重視する近代的宗教概念に基づく研究の問題点が浮かび上がると考える。

(2) 1940年代民衆宗教の全体像把握と目録

の作成

この時期の群小の民衆宗教で、まとまった教義書や機関誌などを作成している例は少数だが、特高警察や占領軍による資料の収集やレポート、新聞記事、ジャーナリストによる批評など、活動の概要を知るために利用しうる資料は少なくない。これらの資料を収集・分析することによって、1940年代の民衆宗教を網羅した目録の作成を行うこととした。

この作業において明らかにすべき点は、発生の時期・拠点となる地域・救済技法の特徴・思想面の特徴・信者層の特徴といった項目である。これらを文献史料を通じて知りうるかぎり、網羅的に調査することによって、当該期の民衆宗教運動の輪郭を描くとともに、戦争や占領政策の展開過程と民衆宗教の関係、地域ごとの特質などを浮き彫りにすることが課題である。

(3) 個別教団の調査

1940年代の民衆宗教の歴史的意義を理解するためには、個別的な教団に密着した事例研究も不可欠である。短期間で消滅してしまった宗教集団について詳細な活動のプロセスを知ることは難しいが、1940年代に民衆宗教としての活動を行い、現在も集団を維持している宗教は、当時の布教日誌などの文献史料を保存しているとともに、今日の信仰実践のなかにも当時の活動の痕跡を残していると考えられる。

本研究では、まず法音寺、創価学会、世界救世教、天理教、大本といった教団が1940年代にどのような活動を行い、総力戦期から占領期にいたる困難な状況を生き抜いていたのか、教団機関誌などの史料収集と分析を行った。

また、GHQ/SCAPや日本政府、特高警察が収集した文書から、群小の民衆的宗教者がどのような主張をし、活動を行っていったのかを整理・分析する作業を行った。

4. 研究成果

(1) 同時代・戦後の支配者・言論界における1940年代民衆宗教イメージの検討

敗戦後に現れた民衆宗教は、マスコミや知識人からどのように評価されていたのだろうか。「腐れ水にボーフラが湧くように、新宗教が湧いてきた」と論評した『サンデー毎日』に代表されるように、マスコミはアプレ・ゲールの民衆宗教を否定的なニュアンスで描く傾向が強かった。敗戦以前の政治体制なら厳しい監視や取締りの対象となっただけのものが、天から降ってきた自由をわがもの顔に享受するようになったことが、記者たちの憎悪的になっている。そこには、戦時体

制へのひそかなノスタルジアがあるといえる。

「マスコミの帝王」とも称された著名なジャーナリストである大宅壮一も、新しい民衆宗教に厳しいまなざしを注いでいた。大宅はすでに1930年代から、生長の家やひとのみち(戦後はPL教団)などの新しいセクト(当時は「類似宗教」と呼ばれていた)への批判を展開していたのである。敗戦後の「神々のラッシュアワー」についても、「いわば近代教育の盲点、人間の知性の死角を利用したもつとも巧妙なる搾取の形式である」と辛辣だった(大宅壮一『大宅壮一全集 第4巻』蒼洋社、1981年)。大宅は新しい民衆的な宗教の生々しさが、文明社会の脅威になると考えたのである。

占領期の宗教系ジャーナリズムも、呪術的な病気治しや奇跡を売りにする新興宗教が自然科学的な知識と矛盾するという点を攻撃した。深遠/浅薄、科学/非科学、正常/異常といった二項対立的論理に立って、科学的な「正しい宗教的意識」を打ち立てるべきだとする主張が行われた。当時日本では、科学力の差によって戦争に敗けたという認識のもと、「我が國再建の基礎は科学によつて築かるべきもの」(仁科芳雄「日本再建と科学」『自然』1946年5月号)だとする主張が広くなされていた。こうした風潮のなかで、宗教の領域にも科学性が要求されたのだ。

このように、新しい民衆宗教の大量発生という現象を好意的にとらえるマスコミや知識人はほとんどなかった。既成宗教諸団体は「前進する主体として国民社会の発展に貢献」(島蘭進「宗教の戦後体制—前進する主体、和合による平和」『岩波講座近代日本の文化史』岩波書店、2003年)すべく新体制を構築していったが、アプレ・ゲールの民衆宗教はその非科学的な活動スタイルのゆえに、むしろ社会の発達を妨げる存在という烙印を押されてしまったのだ。

1960年代に「神々のラッシュアワー」を論じたH・N・マクファーランドは、新興宗教には急激な社会変化がもたらす「圧力」から民衆を守り、新しい社会状況に徐々に慣れていく機会を与える「気密室」としての機能があるとして一定の評価を与えた(『神々のラッシュアワー』社会思想社、1969年)。しかし、そうした新興宗教の思想には積極的な意義は認められていない。彼も、1940年代の民衆宗教が提示しようとした世界観に向き合うことはなかったのである。

(2) 1940年代民衆宗教の全体像把握と目録の作成

占領期、ウィリアム・P・ウッダードが係長を務めたGHQ民間情報教育局宗教課特別企画・調査係は、日本人の専門スタッフを雇い、日本の宗教に関するさまざまな資料・情報の収集を行った。同局が残した資料群、お

よび戦時期に特高警察が作成した宗教調査記録などをもとに、1940年代の民衆宗教の概要把握に努めるとともに、その目録および関連年表を進め、今後の40年代民衆宗教研究の足がかりを築くことができた。

(3) 群小の民衆宗教の歴史的意義

日本政府やGHQ/SCAPが収集したパンフレットや書簡などの史料をもとに、1940年代、とくにの民衆宗教の思想・活動の一端を分析した。

占領期における群小の民衆宗教（「アプレ・ゲールの民衆宗教」と呼ぶ）が学問の対象としてとりあげられてこなかったことには、いくつもの理由がある。活動の全体を見渡すための資料がないという技術的な問題、思想的な未熟さや陳腐さ、活動期間の短さ、個々の活動に社会的インパクトがなく、後世への影響も少ないと考えられること、いかがわしい小さな宗教活動はいつの時代にもあり、1940年代に固有のものではないということなど。

これらの諸点の基本的な妥当性を認めつつも、私はアプレ・ゲールの民衆宗教を研究することの重要性を主張する。資料的制約が大きなハンディキャップとなることは否定できないが、利用可能な断片的情報を互いに接合させるブリコラージュ的手法を駆使することで、一定の歴史的なイメージを構築することは可能である。

思想面など宗教集団自体の性格にかかわる問題は、逆に従来の新宗教研究の方法への問い直しにつながっていくのではないだろうか。教団を対象とした新宗教研究は、一定程度当該宗教の教義や実践を習得した固定的な信者を中心として論じる傾向が強い。他方、現世利益的で一時的な救済を求め、短期間で離脱してしまうような信者層については、そもそもその実態が掴みにくいという技術的な問題もあり、ほとんど主題化されることがなかったといえる。まして、集団自体がそもそもまとまった教義や実践、継続的な活動をもちえなかった事例については、研究の積極的な意義が見出されてこなかったのだ。しかし、既成宗教の救済機能がうまく働かない総力戦期や戦後混乱期において、民衆の救済への欲求がどのような宗教活動を生み出し、社会の変化と向き合っていたのかを理解するためには、こうした宗教活動に目を向けることが不可欠であり、それに向けた方法的革新が求められるのだ。

こうした問題意識に立つとき、重要になってくるのが歴史的・社会的文脈である。ご利益信仰も託宣も、人類の歴史につねに寄り添ってきたものではあるが、それらがどのようなかたちで現れ、どのような意味をもつのかは、社会的状況に応じてさまざまであり、安易に一般化することはできない。それらは占領期の日本の苦境を反映するものであるとともに、その状況に能動的に参加しようとす

る運動でもあったのである。

アプレ・ゲールの民衆宗教は、占領期の社会から何を讀みとり、どのようにそこに介入しようとしたのだろうか。神道系、仏教系、キリスト教系、それらを折衷したもの、あるいは独自性の強いものなど、系統や教義は多種多様だが、さしあたり同時代の社会や政治についての発言にしぼって検討した。まず、道義が頹廢した世相への批判と、思想善導の手段としての宗教という認識は、多くのセクトの文書に共有されており、同時代の宗教系メディアの主張とも重なるものである。

さらに踏み込んだ政治的主張を展開したセクトも少なくない。多くは世界平和を目標に掲げていたが、とりわけ東西冷戦をテーマに自説を主張するものが目立つ。朝鮮戦争などの政治的テーマについて、マッカーサーやGHQに書簡を送って提言を行うものもあった。マッカーサーに宛てられた日本人の手紙のほとんどは占領体制に肯定的な意見を基本としている。当然、アプレ・ゲールの民衆宗教による手紙も連合軍側の勝利を願う立場からの予言であり、祝意である。戦時期、大教団から小規模な宗教結社まで、宗教集団は戦勝祈願をさかんに行っていた。忠誠の対象が天皇からマッカーサーへ、撃滅すべき敵が米英から共産主義国へと移行させられながらも、同様の心性が戦後に受け継がれたのだろう。そこには、アメリカによる戦争を“聖戦”として翼賛する思考があった。

他方では、単純なアメリカ礼賛ではなく、俯瞰的な視点で（冷たい）戦争をみつめ、神学的にアメリカひいては世界の進路を指し示そうとするセクトもあった。たとえば純正宗教という集団は、宗教的融合を果たしたアメリカと日本を中心とした、世界の経済的（・政治的）統合を提唱した。このときサンフランシスコ講和会議は目前に迫っており、日本の独立回復と日米同盟の締結を見据えつつ、アメリカ中心の世界秩序、そしてそのなかで重要な役割を果たす日本の国際的位置づけを、宗教的想像力を媒介として描いてみせたものといえるだろう。アメリカと結びつくことで確保される、アプレ・ゲールの奇妙なエスノセントリズムであった。

愛媛県の大祖教は、因果応報・勸善懲悪といった単純な論理ではあるが、日本やアメリカなど特定の国家に同一化することなく、戦争への批判的視座を築いている。もっとも、必ずしも絶対平和主義というわけではなく、正義の戦争を容認しているから、自衛を名目とした戦争を抑止しうる論理であるかは疑問である。たとえば日中戦争は実質的に肯定されており、アジア侵略への批判的視点はまったく欠落しているのだ。天照皇大神宮教の北村サヨなどを貴重な例外として、アプレ・ゲールの宗教が戦争や植民地主義を全面的に否定し、絶対平和を唱えることは難しかったのである。

アプレ・ゲールの民衆宗教は単純にひとく

くりできない多様性をもつものであるが、それらをご利益志向型と世直し志向型に大別することは可能かもしれない。だが、民衆宗教において重要なのは、こうした分類を無効化する力がつねに作用するということだ。アプレ・ゲールの民衆宗教はご利益と世直しの間で引き裂かれている。いや、むしろそれらが分かちがたく混淆する領域にこそ、彼らの活動の場が存在するのである。

アプレ・ゲールの民衆宗教にみられる米国との妄想的な同一化、あるいは欧米人崇拜は、当時の日本人が抱いた親米的な気分がグロテスクに増幅された表現だと考えられる。また、多くのセクトが掲げた道義回復・思想善導は、仏教やキリスト教のような既成宗教や教化団体が同様に掲げたものでもあり、それ自体としては陳腐なものである。だがそれは実践面で雑多なご利益信仰と結びつけられることで、人びとの欲望と「民主日本建設」の間にはらまれた緊張関係を表象する。そして大祖教の素朴な神学における反戦・平和思想は、その限界もふくめて、人びとの平和への志向性をそのうちに宿している。ジャーナリストや既成宗教が愚昧な他者として否定しようとしたアプレ・ゲールの民衆宗教は、占領期における日本人の誇張された自画像であり、それは同時に、やがて米国との同盟に依存した経済成長への社会発展を推進していく戦後日本が抑圧しようとした自画像だったのである。

1951年10月、新宗教の連合組織である新日本宗教団体連合会が発足し、複数の有力な教団が加盟した。そこには、新宗教が互いに連携するとともに、政治家やマスコミ、学者などとのつながりを深めて社会的な非難や圧迫から自らを守ろうとする意図があったといわれる。島蘭進は、この組織の発足によって「神・仏・基・新宗教（諸教）」によって構成される「〈正統な〉日本の諸宗教」の枠組みが出来上がったと論じている（島蘭前掲論文）。その一方で、その枠組みのなかに本稿で扱ったような“小さな神々”は含まれておらず、多くは制度化にいたることなく消滅していった。だが、戦後日本の〈正統的な〉社会体制がその起点において何を抑圧し、排除してきたのかを検証し、「民主主義」のありようを再考するために、私たちは一見歴史の屑のようにしかみえない民衆宗教の痕跡に向き合ってみるべきなのである。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 13 件）

- ① 永岡崇「パネルの主旨とまとめ」『宗教研究』、90巻別冊、2017年、134-135、査読なし
- ② 永岡崇「一九三〇年代の大本と博覧会の思想」『宗教研究』、90巻別冊、2017年、130-131、査読なし
- ③ 伊藤聡、昆野伸幸、斎藤英喜、永岡崇「討議 歴史としての神道——神道の可能性をめぐって」、『現代思想』、2017年2月臨時増刊号、172-198、査読なし
- ④ 永岡崇「新書紹介 『新宗教と総力戦——教祖以後を生きる』／永岡崇」、『臺灣佛教研究』5巻2期、2016年、7-10、査読なし
- ⑤ 永岡崇「青野正明『帝国神道の形成——植民地朝鮮と国家神道の論理』を読む」、『東アジアの思想と文化』、8号、2016年、184-191、査読なし
- ⑥ 永岡崇「岩田文昭著『近代仏教と青年——近角常観とその時代』／碧海寿広著『近代仏教のなかの真宗——近角常観と求道者たち』」、『宗教と社会』、22号、2016年、43-46、査読なし
- ⑦ 永岡崇「書評 塚田穂高著『宗教と政治の転軸点——保守合同と政教一致の宗教社会学』」、『近代仏教』、23号、2016年、193-197、査読なし
- ⑧ 永岡崇、「教祖の家族写真をめぐる覚え書」、『Cultures/Critiques』、別冊、2016年、378-390、査読なし
- ⑨ 永岡崇「書評 村上興匡・西村明編『慰霊の系譜——死者を記憶する共同体』」、『近代仏教』、22号、2015年、75-77、査読なし
- ⑩ 永岡崇、「靈魂をとらえ損ねる——神の声から考える民衆宗教大本」、『人文學報』、108号、2015年、143-157、査読なし
- ⑪ 永岡崇「ソウルメイトは二重橋の向こうに——辛酸なめ子における皇室とスピリチュアリティ」、『人文學報』、107号、2015年、103-129、査読あり
- ⑫ 永岡崇「民衆宗教の政治性とはなにか」、『宗教研究』、88巻別冊、2015年、109-110、査読なし
- ⑬ 永岡崇「書評 Paul L. Swanson, ed., *Pentecostalism and Shamanism in Asia*」、『宗教研究』、88巻1号、2014年、220-226、査読なし

〔学会発表〕（計 10 件）

- ① 永岡崇「モダニティとしての新宗教——迷信・宗教・帝国」、シンポジウム「日本の近代化と宗教」を捉え直す——「日本宗教史像の再構築」のために」（京大人文研「日本宗教史像の再構築」第25回研究会）、2017年3月20日、京都大学（京都府京都市）
- ② 永岡崇「再考・神々のラッシュアワー——1940年代民衆宗教論へ向けて」、「民衆宗教」研究会、2017年3月15日、関西大学（大阪府吹田市）
- ③ 永岡崇「1930年代の大本と博覧会の思想」、日本宗教学会第75回学術大会テーマパネル「宗教の時代としての1930年代—メディア・博覧会・反宗教—」、2016年9月11日、早稲田大学（東京都新宿区）
- ④ 永岡崇「1930年代の新宗教と展示という実践」、単独、ワークショップ「宗教とメディアの1930年代」（京大人文研「日本宗教史像の再構築」第20回研究会）、2016年8月19日、京都大学（京都府京都市）
- ⑤ 永岡崇「歴史の語りと「現場」——民衆史の一断面」、国際日本文化研究センター共同研究「人文諸学の科学史的研究」、2016年3月28日、国際日本文化研究センター（京都府京都市）
- ⑥ 永岡崇「民衆宗教と1940年代」、「宗教と社会」学会第22回学術大会、2015年6月14日、東京大学（東京都文京区）
- ⑦ 永岡崇「憑依の時空間と不和の共同体——明治期の天理教における病いの意味」、Anthropology of Japan in Japan 2014 autumn meeting、2015年11月30日、南山大学（愛知県名古屋市）
- ⑧ 永岡崇「自己増殖する偽史——竹内文献の旅と帝国日本」、立教大学日本学研究所公開シンポジウム「近代日本の偽史言説その生成・機能・受容」、2015年11月7日、立教大学（東京都豊島区）
- ⑨ 永岡崇「民衆宗教の政治性とはなにか」、単独、日本宗教学会第73回学術大会テーマパネル「近代日本の修養・精神療法・新宗教における身体論と国家論」、2014年9月14日、同志社大学（京都府京都市）
- ⑩ 永岡崇「「二重構造」論をこえて——中山正善を中心に」、単独、「宗教と社会」学会第21回学術大会テーマセッション「天理教研究の現在——歴史から問う」、2014年6月22日、天理大学（奈良県天理市）

〔図書〕（計 2 件）

- ① 小澤実編、三ツ松誠、永岡崇、馬部隆弘、石川巧、長谷川亮一、庄子大介、津城寛文、高尾千津子、山本伸一、齋藤桂、前島礼子『近代日本の偽史言説』勉誠出版、2017年刊行予定
- ② 永岡崇『新宗教と総力戦——教祖以後を生きる』、名古屋大学出版会、2015年、368p.

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者
永岡 崇 (NAGAOKA, Takashi)
佛教大学・研究推進部・特別研究員
研究者番号： 30725297

(2) 研究分担者 (0)

研究者番号：

(3) 連携研究者 (0)

研究者番号：

(4) 研究協力者 (0)